主を信じる者の幸い　　ヨハネ 20:24-29

日曜日の朝早く復活されたイエスは、マグダラのマリヤをはじめ、女性の弟子たちに現れ、エルサレムからエマオに向かうふたりの弟子にも現われました。夕方には、弟子たちがエルサレムで集まっているところに現われ、その手とわき腹を見せました。両手には十字架にかけられた時に打ち込まれた釘あとが、わき腹には槍で刺された傷あとが残っていました。弟子たちは、それを見ただけでなく手で触れて、イエスがよみがえられ、生きておられることを確認しました。それはどんなに驚くべきこと、また、うれしいことだったことでしょう。

ところが、その時、トマスは、そこに居合わせませんでした。トマスが仲間のところに戻ってきたときには、イエスはそこにはおられませんでした。他の弟子たちはトマスに、「私たちは主を見た」と興奮して伝えましたが、トマスは「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言って、他の弟子たちの言うことをすぐには受け入れませんでした。

このことから、トマスは（疑い深いトマス）と呼ばれるようになりました。しかしそれはトマスが不信仰であるとか復活を否定しているわけではありません。トマスは他の弟子たちが皆イエスを見たのに自分は見ていないということで、取り残されたような気持ちになったということです。「イエスは他の弟子たちに現われてくださったのに、なぜ私には現われてくださらなかったのか。」そんな悔しい思いになったのです。彼は「自分の目でイエスを見、イエスのからだに触れてみなければ信じない」と言い張りましたが、本当の思いは自分も他の弟子たちのように復活のイエス様に出会いたいということだったのです。疑い深いトマスと言われるとどんな人物を想像しますか？冷静でやや上から目線ですぐに裁きがちな人に思われる方が多いと思いますが実際はとても感じやすく、熱くまた、率直な人でした。前にベタニアに来ていた主イエスが、もう一度ユダヤに戻ろうと言ったとき、他の弟子たちは「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか」と言いました。しかし、トマスだけが「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」と言っています（ヨハネ 11:8, 16）。トマスには、どんな危険があっても、どこまでもイエスに従うという覚悟がありました。もちろん、覚悟はどんなに立派でも、人は弱いもので、イエスが捕まえられたときには、トマスも他の弟子たちと同じようにイエスを見捨てて逃げてしまいました。トマスは自分の言った言葉を守ることができませんでしたが、その言葉は心からのものでした。

イエスは十字架にかかられる前の夜、弟子たちを教えてこう言われました。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」（ヨハネ 14:3-4）するとトマスは「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう」（同 14:5）と言いました。イエスの言葉の意味が分からなかったのはトマスだけだったのでしょうか。他の弟子たちも分からなかったのです。しかし弟子は、トマスのようには率直に分からないことを分からないこととして、それを尋ねることをしなかったのです。ですからトマスは分からないことを、分からないと正直に、率直に言うことができる人、「疑問」を解決したいと追求する人でした。

信仰を持つからには、どんな疑問も持ってはいけないと考える人もありますが、「信仰」と「疑問」は相反するものではありません。「疑問」と「疑い」とは違います。「疑問」は、分からないことを知りたい、御言葉の意味を理解したいという探究心から出たもので、それは信仰のひとつの表れです。神はそうし

た「探究心」を喜んでくださり、「疑問」に答えてくださいます。ですからトマスは「疑い深いトマス」ではなく、「探究心旺盛なトマス」と呼ばれるべきかもしれません。

今日の箇所ですがイエスが最初に弟子たちに現われてから八日の後、イエスは再び同じ場所に現われました。今回はトマスもそこにいました。トマスが「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言ったのは、八日前のことで、イエスがそこにおられないときでした。しかし、イエスはそこにおられなくても、トマスの言ったことを聞いておられたのです。

私たちは、イエスがここにおられたら決して口にはしないだろうというようなことを、口にすることがあります。不平、不満、投げやりな言葉、あるいは、他の人を傷つけるような言葉です。しかし、そうした言葉もイエスはちゃんと聞いておられるのです。声になって出ない心の中の言葉さえも、イエスは聞き取ることができます。ヤコブの手紙にあるように、言葉で失敗のない人は誰もいません(ヤコブ 3:2)。ですから、私たちは、いつもそのことを悔い改めて、赦しと聖めを求める必要があるのです。

イエスがトマスに「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい」と言われましたがそれは、決してトマスに対する皮肉でも、叱責でもありません。トマスは十二弟子のひとりでしたから、復活されたイエスを目撃する必要がありました。イエスはもとからトマスに現われ、その傷跡を示そうとしておられました。それはトマスを「復活の証人」にするためでした。しかし、イエスはトマスに、もうひとつのことを期待していました。それは、トマスが他の弟子たちの証言を聞いて信じ、「見ないで信じる」人になることでした。イエスがトマスに「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」と言われた通りです。

「信」という漢字は「人」と「言」が合わさってできています。ローマ 10:17 に「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる」とあるように、信仰は神の言葉、また、神の言葉の証言を聞いてそれを受け入れ、それに従うことです。もし、どんなことでも見なければ信じられないとしたら、私たちは日常生活を送ることは難しくなります。車のエンジンでガソリンがどのように爆発しているのか、コンピューターの CPU の中でどのように信号がやりとりされているのかそれを見て知っているのは、専門の技術者だけです。いや私たちはほとんどのことを見てはいないけれど信じてここまで生きているのです。それは神を信じること、イエスを信じることでも同じなのです。あの数学者でクリスチャンでもあるパスカルは自分の本の中でこんなことを言ってますね。「神は存在するか、しないか。きみはどちらに賭けますか？　— いや、どちらかを選べということがまちがっている。正しいのは賭けないことです。— そうです。だが、賭けなければなりません。あなたは船に乗り込んでいるのだから。賭け金は自分の人生です。神が存在するという方に賭けたとしましょう。勝てば、つまり神が存在するなら君は永遠の生命と喜びを手にいれます。そしてあなたの人生は意味あるものとなるでしょう。賭けに負けたとしても、つまり神は存在しないことが現実ですから失うものは何もありません。

反対に、神は存在しないという方に賭けたとしましょう。その場合、たとえ賭けに勝っても、神は存在しないことが分かったわけですから君の儲けはこの世の幸福だけです。神が存在しないわけですから当然そこで得るものは何もありません。逆に負けたとき（つまり神が存在することが分かったなら)、失うものはあまりに大きい。神がおられるのに天国に入れないことになるからである。ぜひ神を信じることにかけていただきたいと思います。

さてヨハネの福音書の最後の部分にトマスのことが書かれているのは、実は私たちのためです。私た

ちはイエスが地上におられたときから二千年以上も経った現代に生きています。今、この地上で、復活されたイエスを見ることはできませんが、イエスの復活は、それを目撃した弟子たちによって宣べ伝えられ、やがて書物に記録され、時代から時代へと伝えられてきました。それは、確かな事実、歴史の出来事で、二千年経っても、全世界でそれは覚えられ、祝われています。この人たちは復活されたイエスを見たわけではありません。イエスが私たちの罪のために十字架で死なれ、私たちに永遠の命を与えるために復活されたことを、聞いて、信じたのです。そしてイエスへの愛と聖霊による喜びに満たされたのです。ペテロ第一 1:8 に「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」とある通りです。イエスがトマスに「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」、「見ずに信じる者は幸いです」と言われた言葉は、そのまま私たちに語られている言葉なのです。

「見ずに信じる」といっても、それは何の根拠もなく信じ込むということではありません。ヨハネ 20:30-31 に「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」とあります。イエスが神の御子キリスト、私たちの救い主であることには、客観的な証拠があるのです。また、イエスを信じて得られる愛、喜び、平安などといった体験もイエスを証しするものです。

トマスは不安な八日間を過ごしたことでしょう。自分以外の弟子たちはみな「主にお会いした」と言って喜んでいるのに、自分ひとりが「イエスの姿を見るまでは…」と頑張っていたのです。トマスは強情な人のように見えたかもしれませんが、その心はイエスを求め続けていました。そして、ついにイエスにお会いしたのです。そのとき、トマスの心から一切の不安が消え去りました。トマスのたましいはイエスご自身によって満たされたのです。

わたしたちも、トマスと同じ熱意をもってイエスを求めたいと思います。聖書を読んで、自分が好きになれそうな言葉をみつけて満足する。教会に来てみんなに会ってほっとする。日々の祈りや毎週の礼拝をそれだけで終わらせたくありません。「主よ、あなたにお会いしたいのです。もっとあなたを信じたいのです。あなたに従い続けたいのです」という思いをもって、主を求めたいと思います。主を信じる者には必ず幸いが来るのです。